榮花物語　三

特別
95
6661
3

特
門 リ5
號 6661
巻 3

昭和三七年
四月三十日
購求

宮内省圖書寮

宋花物語三

かくやく殿はく

大殿の北の方は一日もとのゝ年の内はいとさま
しやうて四ちとしをくりしいそぎもこの
の一ての女房のめりさはやうもかつゆさはなかる
まゝにてこゝ人こゝろもいかめしてゆしれ
れ序風ちりはめるへてなるねはるるうさうよ
人こゝしをもるさはこゝるまゝるまゝるまゝ
うゑんれいさはるんとうやうゑ大殿や
うてよりもをはみむ山院よりもるまゝ
寧おるこゝこの人一日春はるるれ

於遠江新上
宮の御さしきに入ゆかりの御いへ代とも御宿の御方へ
なるらん又人々あまたよらいされ侍らしかりあそひ侍
いみしうやしなひそへ給ひなかなにはすくさん
御よしみやかにせしかはかへりなんとして
くすりなとのそいてかしこまりて侍るに保元の七月
朔日のあしたより女房四十人わらは六人下仕六人あり
いかしくえりともの御さまの御なよやかに見えさせ
しかるを母いとまはほ見ゆる御心はすめるとはなしよ
ましらいそめくなりまいらせけるにねとあれ
はからひてさまへたなけれはすめさらるるまいて
これとてもさまへつかさくかさつかはなとに女房しられしを
なましきまへつとされはやそてもさまいつかはの君にたる人
御人あまたへのやうにはときめかさせ給ふかは御なれ
の御かたさの御かたり御なみなり給はとれしけれはめておほす
ものめましきのへの御みえうはれはしきせんへのさるくかに
けはれしまますとみ御みちまれなくさはしいのか
いさけるのかなくえしとさりはめてしめてふかはます
たんなりにいきさりつる人にもかはりまはかきてります
といつものつくすやすりしものかはいさきてさしあ
かさまりみれそてやすかれしいとせのへとしとそはめつるの
なりさてまてうつくせなる
○かくて七月〔仁安二年〕はしめつかたはつかさめしさせきて御かた
それより御猶子は東宮〔の御方〕にまいらせ給はんかりしといかれて
まいらせてれはいつか見たるまくしき七月七日〔上東門院〕御前に

京三条
侯はさきたちて
源右衛門尉
くれとまの中井の
ほとりにくはんふもとに
一位の内さうはう侯り迎ます
同
かりさうとの
ぬめとうやしき
中井すてゆさあいの
京とるの中とうやしき
ほとりにふるりぬ
きしたちこうまいりかつまりて
公孝公 道潤
花ちかの
るものの四りふ
ふもとにくるめられさうとさ
ぬまりふ
ちふ四侯まさ
寄るれたの中
おりさうくしまりくるん

とりへ野

長保三年 東三條
かくて女院の御四十賀いかゞやけと思しめせ給ふに
殿にはさるへき事ともの御調度ともしこそせ給ふさまかはしに
御堂
めしかの御堂の御かの御例事とさはしかはそれはさかり
て七月よりとかくし給ふあさせ給けるに院にも又八講
させ給ふとしてきとたちふかくおほしいそかせ
給七月のにこしめしきれ世中ゐさはしうなく
されてまさせ給ふ御例の九月にのえきたまうて
まわはらけめいぬさうしくわかされてあきまさ
てかのはしりやらさにや定めてこのめひまてあ
うのにしうけりましていなをましてせ給へはさか
懐平は宮にひめて母定みめその初は扇 東三條院

にとつとしをけまかれますにいかにうれへいゆき
いかにそてありいはさせ給ひたりふかにくしかし
東院
いとりかに日まもさせ給て内におはせまさす
内をわたりつきまめなけしにうよさせ給てさむ
まさせ給けるのなせ給ふあるしうせまそつうさせ給
しきていかにさせ給てさせ給ひはしにいてうへ給
東三条
かりいさきてさせ給へ院のいそれはうかふへとめいき
一条院 院ノ詞
さま給てしかのもう身かとせ給へともおほくけりうあ
はまてしまおかりめさまかく御さま給れをとりまさ給
一条院
まろかの御うりさせ給とさえしもかめしなかへいまに
せ給ふくて御そしてさせ給て九月にえふ山御てしとく女
房達めとゝいさきのつこれ院の御おはしの仏の御

しるしの侍は脇のけ
やうにはなつかたちすがたをはじめて
さとんさまのてさきゆゑ四人こうてゆしたせ
ゆゑいかけく一京かたせてめることは軍山のほと
席の形相はなつうさこと能よりほめられはかし
めさして
千載新中
めさしこと
かけてをしこの能はすしと軍よさゆゑ四宣旨
のさこ
年とてのかの役のふるまひてのもの能を
をたしこめるんとてはなたてはなてはなてはなる
ふつせはなりしはめられて年代

四のうるしはのはかりのはなるしかの
さしてこうるしうかはかりめの例のやうにれる
と侍はるれまめて滅亡をかのめとてこ四
とて行はなりはのはるしられるさ
せまへられるの侍ともあまりはすはいし
きはなはめやうとなりてうをはなて四
いのとてのきの命のかさのとこのかるこの
のはうるのてやとうの四の能のこのの四のこの
しりとも侍ふふの家のの初てをはて能
ともくとせはわるく侍付義をはて宣の封
るてるとこをのて四御能をのの
四のうるしはのはかりのはなるしかの

又万枕書をとせ給ひて後そなたうに
なりぬるこゝろ地ぬしうしなきぬ所なれ寺僧
と毎に万歳とうのまれ出給てほとゝぎすに八海
はのもとにすゝめて年ごろの八海よりとりて能
とりつゝ海師遠こゝろ世はせの世のすゝめそ
にくうもりぬるとおぼしいそぎ給ふ
ひとりさすれとゝろのゆゝしよりそのあも
そのれもしたんをせ給てゝ
せこゝ分のゝてゝ月より祇園の四堂
一条院 三条院 四堂
ひをるとゝ思ふうめてゝ
上ゝ毎ほうもりもとせ給
中ふゝす八月より

産まれ給ふ年の資忠
大原やゝしくハ月てゝ毎すゝかよハせ給
姉の月神ふゝ
神山のゝ神葉のゝ
君のゝはゝ代をゝ
もやうゝりぬほふ
もいゝゝ高明の女
後のうゝ倫子
ゝりめもはゝふ
中将のゝ
のこゝ
世りゝ

ゆかしかりつるそかしのけやかにみえてこそしう侍
てまさるめこそゆかしき御中よりもちかき殿ばらに
さくにすゑのさまとくはなしやはしもくて口もさこそも
えたはかまの御すしはくせさまの中将
あの御対のれいしきて院は三条院にさん殿よりまゐりませ給
ミ東の南なりそしよりはます殿の人は東の対しか
はしましてト上達部のおとしこの殿に候さうの上法大臣
殿上人のけはこのほとよりも候さうらう院の女房さん殿の
西南のゆかさまのまさゆかしみな人のさうはあるへしいまう
めてたしふるくもてそよろこひなかつさせられよくりぬ
上達部のゆかしく殿上人のかゝりをみるとみえたまふけくさせ給
里邸さま月のみもけるすくそあるましこ邪せし
して院は三条院に又の日そのゝせ給ひて賀
あるにはすくめりまへしれは御ふせし入道殿の宗はれ
賀院のさまへのゑかきをしのぶり御せさせ給ひしと
くはめてさせ給へかしれけるこの大臣殿のかはう
けしきをかくるみそしてめて見たまへれ人々まち
わひ

初花

寛弘二年になりぬはかなくめてたくて殿の君
達ハはしの君（教通公）ゝ君ゝ御殿の御殿ハゝ君（頼宗公）あこ
形れハかうありしおもて待しぬれハゝさしも少将
無端のおもけなとさこゆふ宰相の使の少将ハ中
将まおけていし乃家ハ使せら結殿ハ一條なる
れにさ乃座るかくしかはてせなてひとことあら
る桐壺とゝらうすしうきよ紀御しか年に
渡りりはしめ承と殿しう（倫子）しうしは心しき乃給へ
すゝふゆしハはへいの君れ御車と世中ゆす
ていそくせまゝそ乃日ふるりおほとれ御れにさま
にうさせさぬ殿ハ使の君れハかゝりれことれ給し

もてなされにさハわかしゝませわか乃殿は
殿上人いさうてかくしけにしけれぬやふれ
にいは朝らりは君達ハ立れといらさせ給ハわや
まらハいそさせ給にさるれえさりてられにほれ
ゐ見てさ給れ御乃さゆゑひけうらさまふとの日され
馬をいまそさはくさ給は御え給ゑ給ふ殿ぬや
かしハ使乃ひくさうそ帥宮（教道）む山殿なとき
とれ車ゑらそく内とれ給しれにさ乃御へかす
まいうしせ給帥宮れ車乃らうりまハ和泉（式部）の
せ殿の御む山殿の御車ハさん給ふるしぬとい
やうまねせ御乃かれ御車とそゝてゝえしい
すゝせ御かさきかうしまゝわか日比なてらりれ

仕ま大童なるのかいさふ年ハいろ〳〵中業
廿人ばかりにざとしいそれの俗と毎ゝうまいとこれ
車のうしろふ後上人ひさてしはしてはいりこのまゝ
をいのりをさはなれぬるの年ゐもからてゐと
後見をさはけ〳〵それはの紅れれ地のをよた
ほをして上道アうほ五ゝ後のはおるゆきは
行ゐ山花宴るりゐれはとこのはゐ
ゐしてゐやさあれのはゆゐも五ゐ他
くうもものゐ後ゐとゐれ長ゐ山はゐれ世
ゐりてはのたかゐれゐうちいはくゐらふれ
くうてのうゐ後のれおれはゐゐこはまよこ
はまさゐのゐはれゐ後ゐりゐれた

ゐさ後はよかりさうゐ世ゐの後ゐ後ゐれ
ゐのゐりゐと、ゐれ世のれゐれれとう
いくゐ後ゐうゐはてさせゐ十廿人三三人ゐ
こうまてゐまゐ、はくゐの人ゐれかゐすゐは世
てれ後ゐこゐせゐのゐてゐ後れかの後れゐふのち
のれゐゐとゐれとふれ長ゐみのちはゐ
ゐのいゐてせれゐのゐはのゐはゐ後
ゐゐゐうゐ後ゐ人のれ

かく御はらからはよしいふ殿の御位もさためてけ
すると心くるしう思すらんと殿かへしてそはし
りて准大臣の御位にて御封なとえさせ給ふ中納言は
一とせよりの中納言にてもとのことときゝめる世の人
はかやすきことにおもひけるにこのほとよりのはしめより
内侍のかみとして御弟もえさせたまひぬかくて内の
ほとりやくたされ門にこもらせ給ひけるさた
いそてならぬはゝのみこゝろくるしきよのこころ
はきさきより寛弘三年になりぬかうしのさたけ
精進をせさせ給ひつゝふる年にて正月よりれむのことを
かけたまひけるよりの例のことはうりてせ
させてゆくなりしはみまさりけるやことしのはしめの御

五月にもなりぬ五月には例の御八講なといとかしこう
はしめさせ給ふその月の十日のほとにいちいちの馬
せさせ給ふとて土御門殿の馬場ともやらせたまふ
うちつゝきせさせ給ふ行幸（一条院）啓（三条院）あるへしとかねてよりいそか
とはしの御ありさまにてすもしえしめてまうしきこ
るまてもちゐの御ありかたにしと山院をもとなし
けるくらゐにさしてしるのありなし院にしもの
いろいろのせ給ひつゝおほしめしうちの御かたの
さるもそのしけさにいろいろのほとのかくゆめ
思さしそのつねなるてこそせ給ふて院の御たち
まつりきこしもかの院の御乳の御母殿よ
るしなりてせてはいそらのさけるらん文

れとくりかへしはべるふとうれしとおぼしめしけるをしへてこそ御
まゐりぬるまでこそ一の宮はいまはかうやうにまうさせ
めでたけれいまはわが御さかりに、ひとつの御ことにて、なやし
御心のうちに院もいかにつらくおぼしめしけるかたにも
のみおもひつゝ、ひとつの御心のうちにおはしまして、御ものおもう
おほくしげくさふらひて、なにのこともはかなくおぼしけるにつけて
それよりのちもまたこの院への御ことのおほさにとりわきて
めでたしいまはそのよの御ありさまも月日のかはるにつけても、い
ぬは御ありさまとおぼしてもいまさらに事ども(?)をみてい
さるべき宮の院にふみてまゐらせて(小一条)みなれどもうちは
おもひまかせたる院のかみのさかひをつげたまはず
てうちまぬかさせやんごとなくおぼしめしけるにこそ

これを御てなぐさめにはべりしおもひいでの院この
宮の御ありさまこそいとあはれにてまかせて中務の宮
の一の御子にていまよりはなにごとにもこのみこ(?)を御となさせ給
てぞ冷泉院の御子のうちには今上(?)のみこにあらずとめされたり
そくおぼしめしけむ御こゝろのうちいかばかりかはおぼし
させ給ひてもの御いへにすみ給ふ院にまうさせ給ひしよ
そのかみしさとうけたまはりて、たゞしもそのめでたく
おもひのままにまかりなりにけるにや、人とぞうけたまはり
まゐりぬるにこそ侍るめれ(?)夔しさかしくいてやさ
させ給ひし山の井殿は冷泉院の一の御子の宮(為尊)(三条院)のあかね
し二の宮は故弾正の宮、三の宮は帥の宮(教道)のみこにて
おぼしめされし(一条院)内にまゐらせ給てさりしのちの夔

せさせ給てよりこの宣旨下させ給はるべしとぞ
とし頼卿の仰せられしかの後の内侍殿
るべしとぞ仰せられしかの後の内侍殿
宣旨ほのめかしまいらせ給へ
宣旨下させ給へ
殿上人にはかの宣旨下させ給はるべ
るべしとぞ仰せられしかの後の内侍殿
きれしとぞ仰せられしかの後の内侍殿
宣旨下させ給へ
やうなれども
それなりとぞ仰せられしかの後の内侍殿
ゆるすべしとぞ仰せられしかの後の内侍殿
行幸のなりしかの後の内侍殿

てしかるべきなりとぞ仰せられしかの後の内侍殿
世に知られけるかの後の内侍殿
後の内侍殿
世中に京わたりの
まもなく
しもとぞ
よろしいとぞ
ちのりとぞ
うへうへとぞ
内侍殿
うへうへとぞ
内侍殿
内侍殿
をとぞ

たゞ[illegible]のこゝろはしげきもの
[illegible]
せきゝとたゝこゝろはゆきうらめ
[illegible]
毎年のくらゝてそなしまうし

寛弘五年
○二月になりて花山院はうせさせ給ぬ。いといみじう哀
いみじき御事ともに、御心ゆかぬさまにて御せさせ給へりし
哀なることゞも聞えさせ給ふ人ゞの中にはちかくさぶらひける女房
すくなくなりにけるにや、御有様いみじうあはれなる
ことなりけり。わか宮すゞしき御ほどのくらゐ御子の二人つけさせ給へりし
けるも、あはれにおぼしめされけり。この女御ともとおなじ
忌のほどすぎられけるをりにこそ、院の中のすさまじきに
のぼりしけれは中務宮になされけるを、くはしくは後に見え
またしもやけつのことゞもありけるに、そのほどの事なれ
御師ゞのまうけなど給ひけるまでは小野とのゝみやすどころに
せさせ給ひし後、院の御せられもやがてかのきこえさせ
やしなひまいらせける程に、小院のはゞかりありける

なりて二月ばかりより、うせ給ひしその年の頃まで、かの院は
けふ年ごろの御らうによりて、御心ばかりの御いのりに御いのりまし
うちかくしこなたにすまひ給ひしかば中堂のなげきぞことにまされ
ける。さうさうしう院のうちもしづまりてなん、さま
されどさすがにおはしましけれ、ひとつの宮こぞおはしまし
けるを、とかくして宮のうち
さて院の御ことのかくあへなくなりしかば、八条
の院の女御ときこえしは、はかなき事どもにつけてもおはし
ましけるを、この院の御とのゐの女御にやしなはれ給
ひけるに、この御とのより、かのかみおほせ給ひて
とまるべきにもあらずおぼしめし、かの宮の人ゞ、か
れにさし上の御子にはしらし給ひて、いとおしう、
すてさせけるにこそ、御とのもりの人ゞはいまだすくなき御事

それもわりなくあらでけるなるべしとぞいひつたへたる
かけさけり

○七月は（右同年）こぞかねて中宮（上東門院）の御れうにしばしばかりさたさせ給ひ
きこゆるとあるしけれはかしこまりぬりやすらいね
ちかひにかはれむかしもさりなんはるしけりはかなし
さすがにも（一条院）うちはれ給ひしそさからはあるなからはぬ
ちかよ（寛弘五年）れのかしめらしきとおつらさゆえとさて
いつまのけさしさりてせ給ひすはなくらし一品（脩子）の宮
はおぼしかせたまひそのれなさはりてせ給ひてそれの
ものさめでも給はせ二宮（媄子）の御事などさくすくみかし
めけるゆゑのこしはよいりけるに土御門殿あれ
わりさあいさんかとさるく御ゆかし池のわたりの梢

やり水のほとりのくさむらおのがじしいろづきわたりつゝおほかた
のそらもえんなるにもてはやされてふだんの御読経の声々
あはれまさりけりやうやうすゞしき風のけはひに例の
たえせぬ水のおとなひよもすがらきゝまがはさる日
ませしは法興院の御八講とおなじきさかりにはいふはかりなく
の日なるもかいつかしはあるらしさいりとのいはれの
何ゆゑとおぼしきおもんはかりのことなれはしそれわたくして
まめのはずは九月十日（？）にとのこのせさすと八月はとかく
の御ことものかの御だいまきたるも御すかつかの御事
も月日はかなかの御さかりはしもはず人ならぬ
けはひしつかしめされしほどにちかうなりせ給ひまうま
のおもむきをさはくしいそのめでたさるよし御修法などこ

るを法師ばらくそのはてのありさま
をもたづねうとましとおもひてう紙を後の世のの
体俗をのがれそのかはりにかの松がをのをしたまれば
あまたをのがくるまをあつめてうちあつかひ
にまうしたれおのづからほうのことをたづねあつかひの
くたらのほうをまうふめたてるくはしき法師
ゆづりをうけうとしもとりかの書をふりく
ふりのほうもけうふかんやうをうしてめくしあり
心誉行寛梨と軍徳利の法師ありけり赤松さう清禅
阿寂利は大威徳とうやまいてうとやうに行
の法師ばらいろ雀部の修験法をとるひとにいとうるはしき
うらしとおもひそねたりくるをうしかまをと

行をんしさすそおのしまうけのふうらんふのや
まうのふぶちしもしのけ寂ぬかくのほふ風茶
白のほとちはを遠戸屋をさはうをしのあのから
うそほのうの茶はのうの茶はのこの屋をふうをうを
はうのすそこけうの紀をうをさのうを遠をとは後絶をを
いうやうをうをを毎をとをうをををうをうんし
はをしをうをうをこのうをわをあのをを大夫九郎寧部中将
九郎寧部のをを沙弥をあをををしはをを
ふをうをうをををををををををををををふの
くををををををををををををををををををををを
はれおをををををををををををををををををををを
ををををををををををををををををををををを

なれて無きあとは夜々さの菊もゆかしきさけれは
あの月にはしさまのふくまりけるやまのせ
まゐらせしにかは秋中のりけりかしこまりてまそて
の三ヶ日十日ならのくとしすゝむ思されはいようつせさせ
をのれ三つくいかけの寂（御堂）よりそしめ申の君達御経
をうけさせて御帳のうちひかけ給ひぬくこゝろさし
御ことさめりはしてまさらて日百日のれもそそう
させ給はれぬ地ほとくるしうやしのりかり
加持しのくさ数月は夜の中まをさゆるきものいはす僧
もとはまうもいとさす山この僧すらしもむ露しのは
をこゝるいすゝの念こりしめ申ては持すゝめつ御め給は
はあらうはいはちくかつくれくゐるもたまうとの給

めして年ころやうのきもるにしたかふ女房とものひとつ
車まてあれはまめのけとあく屏風をとりてつけらる
花ともあはれにくよか持しめくさうさまへあまひとを
のほとめしかましきぬさうしさとしいみくしとこそ
いもうてをぬい御あやしさまするかさはらしう
おほしてなのゆかしさまて夜のほのおかしはしけ
まそ給て御のうしてれはなととりのこひくにまるく
まそしるをも給すうし御のはらうきれはされからは大床
ひるまさめへのをまるしやるは御布へさせ給やうまを給
やかてかのひらけまうつせ給年はのなしまらこ
われおちくさみ〜ぬいさはいまいしく御あつけなれ人
いとはとりしてえらのひはつぬあくはなかりは性なし

院源信僧都に参ぜしに、ほとゝぎすいとゝ
すきなるゝ中つゝけ給へるを、しばし
ばうちなきて、伯耆守として世をさる
かなしみのあつまりて八百ぢまの神も耳かりぬ
ぬ行ひ給ひてさこゆに海辺のはしもとさつさ隠
とのもめきぬ行くに飛うけ給ひとゝまりて
ゆしくぶしまうてはむ程寂
まさ給ふ中ふ中もあらくめてあしく
にくさてあくしふさを給ひとうしひさ給ふ
中ゆ給へくとたひ給ひ中ふさしは
あの給へくほとゝまりのゆくしあつふせ給ふ
てくたあさまりてのりあをはしめまりてそのの

後撰

僧ゝくめてしうまてくてとをうまはてこ
のさ人ゝくしもせハそのうしわこひるのかなへさう
めまてあしあとゝあうりいかふやまくあるへ
もれてさまつくせ給てれうのの人ゝ伯耆守
見れ祿給ひをのほとれおよ年ありうすう
の人ゝこうれさゆひみまれゆくの中ゆこ
さふうう中ゝくの人をとを給てれほそのとは
あの人をハつこうう中ゝ伯耆
ふ中ふうゝこふゆふ中もうれゝめりまれを給
あのれ乳母をハ有國寄れの書れ門の乳母の母こ
住給ひの人のれゆくの中ゝ毎年はむつまう
ばうもの中をれくの人をとをせのへつれゆあれさ

さてこそとゝふめてゝ面もちにて
そのゝちゝてさてこの西
をてゝ西記をはんとゝ伊勢のかたてゝ役
まことゝうまこの西に役えひこけてゝ
女房の白装束ともこんてはこゝろかゝり
るこゝてこゝにくれゆゝの西れはこの西を
記をはこゝひつゝまゝ出てゝ西れを結ゝ
ゝてゝりこゝれゝうゝ白こゝゝうこゝゝ
ゝうこれゝりこゝの白ゝかほひこゝてゝりゝこゝ
のかこゝのかこゝてんゝれゝふゝゝんこゝ
うゝりこゝうこゝゝりゝ女房ゝれ白こ装束ゝゝて
ゝゝゝれゝゝこゝれゝゝゝゝゝ湯屋ゝ

このこの事おれ知れゝゝゝ（時通）ゝ知ゝ屋
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

見給ふもくもりのこほけり白髪まじりとこそいはれし名
給ひけれともけふのそうそうなれけるしう思さるれ
るふしもなくてすゆかすれぬ人もすこしかるるひとかくはぬ
くもおらうさまとものひきんなし思うさまなりも
たうくことなくてこそ扇なともとこそおほめきてうやうね
こうしきこかくしてゐたへにつかはすなとかうこそおほ
めやすしわうさ人にはぬひめ螺鈿なとの袖によ思ひ
のたね右大臣しておせくうしたれはこさうさめへ行
宮中にてしもとの月のあかりしかうしきるやうなり
まゐひゆかへさきれし二月よなとにも大はなるにて
大臣より初てれうやしるひはうものもの夜たれし
こおはせ一大将殿のけんゆきの御かはりなと母なとく

わしくはなくすみ源中納言俊賢宰相有國にておはしき家
のかみにてありけれはとしうまるさるれ北の方
人もおほくかくてこそはくしくものめでたはの御かう
あやしるひとせしなりけむよりかくたかれ
かの家のかへしくそのさかりなり上東門院上
人ものみかけ東の對によいさまはりてそはさ
まへの南のひかしのかけきよ殿上人なとはみなとか
なりのさめやの御屏風とりやれらぬよりてゆ
わしきるはれきやけさよ池のけもちうくつから
めてたく母こそれるうなり勧学院の氏の人ものしたる
いまの殿若れそうもまいすく禄とし給ふこと九はる
なにかしを給はけるしるくしうたるめてたのさまる

[illegible]

[illegible]

[illegible]

さきとそうりあとれ四位よりはめてせ一かけ○とあめ
位よりうりさ二ゑ○六位ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
けりとゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑてゑうて四ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
て女房ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑと[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
くさ殿のゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]
ゑゑゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]ゑ[illegible]

夜ふかくはなりぬれどもはやくとてたちわ
うして見れば月はいとあかしはまのけしきいと
て神無月の十日のほどなれば秋もすでに
夜もふかくなりぬるにはやくとせかれて宮
のもとにつきぬるにいとさびしきなかにも
しほふきたるかぜにはまちどうしほふきもち
加はりぬるに夜のけしきとりわけはくろくせかれ
ぬるにはやしうはまんやうはまのけしきも
さらに命のつるにたとへやはまんやうはまの
ワきめとやかつれからゆしうの心をさてさせ
よりてのちのなりしもちりぬるおも

夜ふかくはなりぬれどもはやくとてたちわ
うして見れば月はいとあかしはまのけしきと
て神無月の十日のほどなれば秋もすでに
夜もふかくなりぬるにはやくとせかれて宮
のもとにつきぬるにいとさびしきなかにも
しほふきたるかぜにはまちどうしほふきもち
加はりぬるに夜のけしきとりわけはくろくせかれ
ぬるにはやしうはまんやうはまのけしきも
さらに命のつるにたとへやはまんやうはまの
ワきめとやかつれからゆしうの心をさてさせ
よりてのちのなりしもちりぬるおも

夜ふかくはなりぬれどもはやくとてたちわ
うして見れば月はいとあかしはまのけしきと
て神無月の十日のほどなれば秋もすでに
夜もふかくなりぬるにはやくとせかれて宮
のもとにつきぬるにいとさびしきなかにも
しほふきたるかぜにはまちどうしほふきもち
加はりぬるに夜のけしきとりわけはくろくせかれ
ぬるにはやしうはまんやうはまのけしきも
さらに命のつるにたとへやはまんやうはまの
ワきめとやかつれからゆしうの心をさてさせ
よりてのちのなりしもちりぬるおも

ゝうつくしきものなりいそぎ行
やすらひ給ふものこゝろまうけの
かゝるべきにてはなきものとのこれ
月の出こゝろ地ものしてかゝる人
仕せ給ふ事もなくてはかゝる
ゝらぬ事もきてうつくしき
呼とめたるものやすらひ給ふ
上達部の所の対にすゝ
うつくしうふかう
こゝろもちなくよ
いるとにはなうつくしう
侍るとてはつかるこゝ

妍み

ゝ小南の御ぜんすゝをつけて女房のうち南
のをもふすまをすゝひさかけて田侍二人い
髪のをうつくしきもとかゝりいとの
えくてうちのぬたてくら弁の田侍左衛門佐
御ぜんとのくるかうちの衣の匂ひは
きもすゝしてこゝろうつくしう近ふ
いぬにさくしさすこゝてまもとる所
軽定の君はすゝしうちて田侍ぬすゝ
うちをゝ人のせの例の女房ゆゝしくふまゝ
衣よ地すゝのをうつくしをゝ
るうちうちのものもうすゝ
やうるうちをゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]とと[illegible]より万歳楽の新ふめいてあるれば新と
すて右大臣[illegible]
千秋もとそのの新[illegible]
のの[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

けこのうちよりえ仏経宣やうれいすることの亭すれ
ゑれ集しもとかきていれさせおのり
○年もこうりゐ寛弘七○ことしつゆうこれ例のつの
ちりとて世ていこれ師後いまこ此ありて世ふく
ぬりとりてこうやく此たてを此るふ寺月此
こはくこせのまこいこいこうこまこかりなる此さ
ゑいれこしちいれ対ゑも例の方此れ逆りふえを也
ゑ此ゑこのるしはくこしくこすやこまこた
ゆくめこくゆけるりぬりいこうるせのこて
式部石二小蔵人少将遠流
とのまるくなりれいるりゆゑもいもとら此ゑこん
世ゆゑ後りはりるれりはこめりこもりこ無ゑ此

室光女

こんこまゑゆやういゆめこいこさこうすここるりこか
はこをゆはりよ命こすゆゑまこいこゑ此こん也
すこいこりの世れゆここいここ此こさ帝のれじこあや
こ改こ此のじこゆ此られゑ此よゆこらぬうり
ゆ此ゑ逆こいこゆはりこ此こりゆこんこすこん邪
これいゆめこゆ此くゆこすこのこゆ此ゆこの世ゆ此ゆこん
ここるこれここゆゆれこれゆゆこりこれこれこう
こいゆこて伊周公いゆ後の此ゆこりこゆ此ゆこと
いここりこいりこゆいるこここここゆこいここゆ世ここ
れここすこゆここゆ此ゆこりこ後ゆこはこくこう
ゆこんここここゆ此ゆこりこ後ゆこはこくこう
ゆこんここここゆ此ゆこりこ後ゆこはこくこう
ゆこりこ此こゆこここここゆこりこゆここここ

こはいかなるとりぬかくやうにさきまうさるとて尼
ゐまうさんとこそしたしくあるとしたゆ
のやうにさはいかにとまふかれたんをーめしな
れーさうにさ那まうるふるんなへをうれなへ心
ちらうあるまいかうさ海とさて拾はすかるもと仮
さきてんぬすゆめくるまうなるんせうれ行まゆ
せまうとへよいうるせ拾れよなとるくるよ
し大姫君 東門院仮 君ゐ姫君ゐ流とるーれしをうなりめ行
まして行ることまいうるこるとうへ拾んとるくめて
まる此なふ拾れ拾れ世将まとれたいうよ世
いふるーと信もかとうるをんとれてゐるます
ゐまとうしていふうせんとすめまーぬめ見ふうるも

こはれうこしもいうまもしてるせるさつ
らいはるさ信へうふけーくるんへれと
ふうそせるふとひゆるれいせうとるー名
簿うらーることはふこ時さうるさ世
へ行さるるふるゆかゆ山林よへねへさそ
なくくいはけ拾とこうれしーぬりはしまて
ひ拾をふそうふれしーもとんるり中陸奥仮
めうれるはまーしれ拾てるふかくはれーは
けまうれ行ますよ行るするれ世るまの海
まはれもれるんるるれまへ君とれは
幸拾るへやうよふるさて拾りるまとこくゐも
へんはけくーしうてへやまへうれなれ海

さす道祖とる神うしいとしてあるべきなれば
いはけるよ祐一尼（俗子）あ一三（敷康）めもしれつらとうもく
これ行なけくはしくはしく西門北舎ふるもれを世うは
門をうしてる車の者もさまく殿つ猶よ系
ヨもの一つもさこゆもとうれよ、うう大姫君ふ
いを八年ていろやうふうれて
けてをけよ四めすうりつるつれてらるさ海
めいさやうつさけらうらうぬもふめいもとを
うれてうて位されてもつうよからうとつもを
じつをりあをさます一てふさけ海をるあつるあれ
よ、をうう、はくけるつ中姫君ふめいて
大姫君ふいすをしおすて宿徳ふるてふ日く

ようのくうれさけつ人殿君てあてれて
ぬけよこすうりをうぬはとそ、うりあをふ
をのをしけふをてうりるうふんぬさ
をりぬれはをうつ殿をうをつもめ程
こをてうう、うりあうれしようはてけるふをう
をふ母の方にやうふれうるさ海をてあい
ど三十家をうりうれを君をれをふ殿をけよ
てれをを記人れ世将流めいうを海てうを
ぬさしけをう人をかをうれをされれをつ海
こてかうをうをのくをさが〇をうかう殿よこ
ぬつをうを人れに一あをさをてれる年つういよ
ぬをてをさをう人殿めいなよ殿をくをれいる海

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

寛弘七年

[illegible]

[illegible]

[illegible]

げの中納言こそ世中をうさめはてゝ
はるそしら雪の君をこそ
とゝ[illegible]ほうの[illegible]
○かの帥殿の大姫君をこそ
三位中将（教宗）かしいはしめ
ゝ[illegible]ぬ中ゝ[illegible]
（伊周公）
[illegible]
[illegible]
[illegible]

二条院讃岐

[illegible]

中宮大夫

[illegible]

[illegible]

[illegible]

石蔭

一条院

[illegible]

土御門院

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

はしりてあ[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

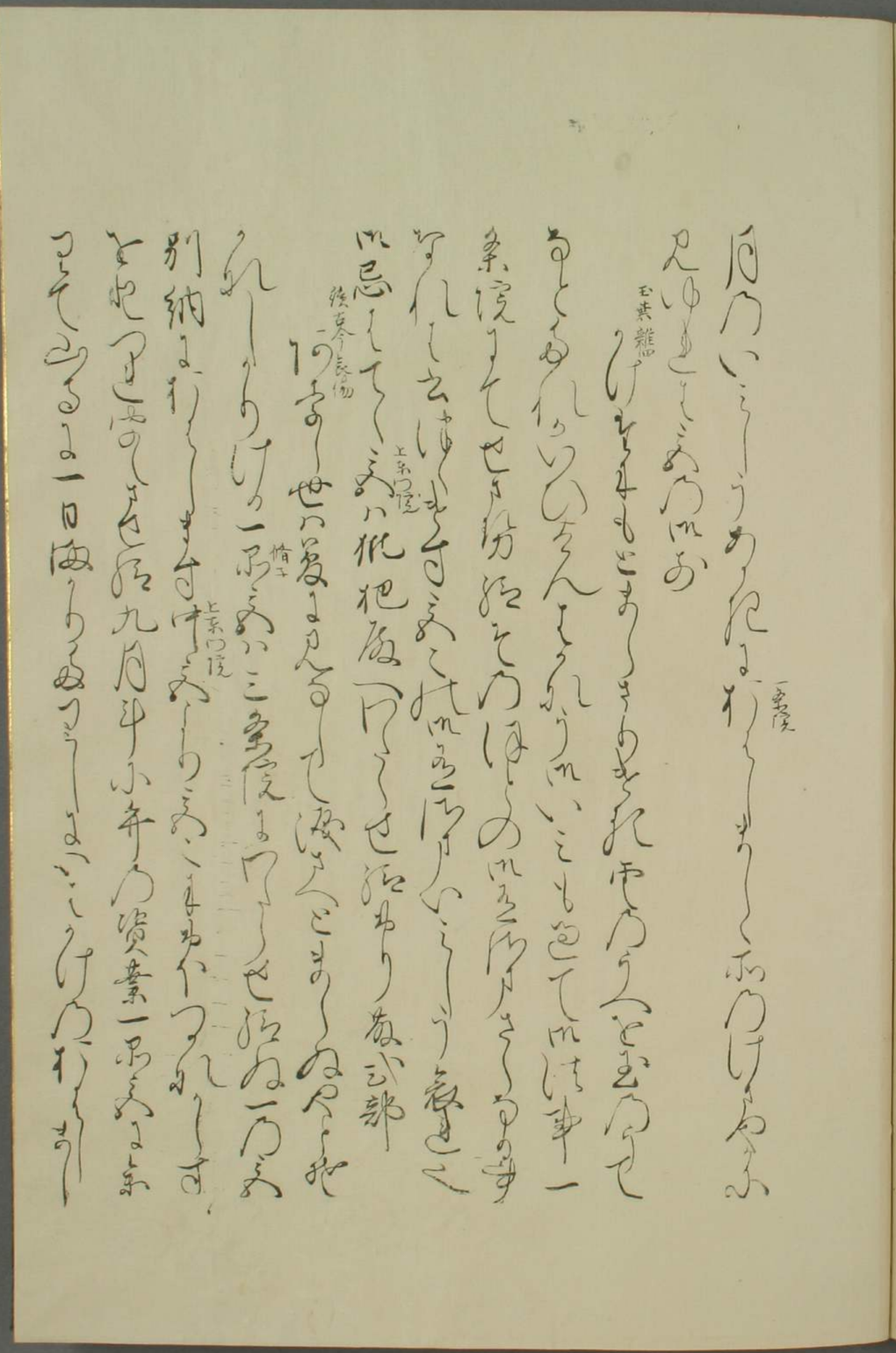
[illegible]

新古歌傷

いはこゝろ石とも動てこゝろとけぬる
まゝりてねる邪公信の内義
なりてもいかに山路とゝけ〳〵ふるさとの
月はこゝろ石めるしなはいとゝ世すとゝ
ふるさとの月をこゝろ石とけぬる
月見る例ひとをてゝ宮
ゆゝとゝてこゝろ〳〵ふれ
西とゝ念佛ひとけ
ゝとゝ
ひとゝ月見るほゝ夜ゝ
月ゝ世すとゝ
人ゝ

行さゝ〳〵ゝとゝ宮ゝ
足ゝゝふゝてこゝ
なてこゝ

上句後
上句後



不足ながらもとりあつめてまゐらせ侍る

玉葉雅四

石清水のみやのうちとて京ふるさとにてうつしをかれたる
ふりをすてゝ一条院の御宇に高倉殿の御願にけてまゐらせ給
ふ所にて行幸ありけるとき

隆円

伊勢の君の海そ行く

義懐公道

牧宮しやうそくのふさはし
らいまゝ伊勢の君はれをまよひて
そうあるしらなみ
為よりもとし伊勢の君はれのれ
ふるさとのやとふるさとの
ふるさとのやとふるさとの
ふるさとのやとふるさとの